朝夷巡嶋記

第四編

四

イ 13
939
5/19

門 イ 13
939
5

朝夷巡嶋記全傳第四編卷之四

東都　曲亭主人編輯

中輯第三十七

珪浦曲乃　道人
田居中の　女僧

當下廣光嗣忠ハ忙しく紙歛めて。義秀が左右ゆつゆく。嗣忠四下ゆ眼式配ゑ。廣光聲を低くして絶て久しく朝夷ぬ。去歳乃暮春小松ゆく端ゆく別ゑさうり恩ゆ感し。義を慕ひ日とく忘れされば。今とて忘ゑてうふゆくねど。送ゑ潰ぶ簑笠ゑ月さ暫時雲隠れとく敵狡躬方ゑ判ゑうも形く挑鬪んとせゑ危ゑ。苟且なぐくれや。西歳何國を徧歴志ゆひうゑ又いつの比ゑうゑ當國ゆ來まうしうゑ尊體いとく恙なく。圖らずも再會ゑ。海月の骨ゆあゑ心地とく歡び言語ゆ竭し難し。其外ゆ

房仙文庫氏寄贈

侍る壯佼ハ信夫荘司元晴翁ゆゑ主君ゆを使ハまし。馬糧標吉郎嗣忠と呼るゝの則同志の義士あまた心をあはせ引合まゐ嗣忠を恭く額をつゝ英名豫く耳ゆ裏く三郎殿と知らざるハ狐鬼の力を揣ぶ〻く漫ゆ虎威を犯し。礼を許さぬ人と勸解れば義秀うち頷きこれも近属この地ゆ来く足下の義勇を使ゆ。三共侶夜をこ発く賊柵を窺ひ欲定めて欲る所あくん。されども月下ゆ集合く時ハ機さべ遂ゆ賊徒ゆ怪めらるゝもつゝふうありて。今宵ハら式徘徊ゝまどそ。その時刻尚早かり。要時樹蔭ゆ退死て送ゆ胸臆を盡べ。三三も来ゆ先ゆ立く。俱ゆ四くと一町許。業取立う樹下ゆ引け入るゆ裡面ゆ小ゆ堂あり。荒果う戸を推開く義秀其ハ尻を懸べ廣光と嗣忠ハそゞ左右まる。燈籠の臺ゆ腰かけ

石を床ゆ坐ゆ。対ゆ義秀月を仰瞻く夜ハ半ゆ更中ゆ。つゝふゆ心ゆそゞ。盃の雑談ゆ先ゆ式説ハ式ゆ去歳の春小松ゆ三及一三ゆ別ゆ。姿を更顔を変く信濃國ゆ発式。近江路式遊歴ゆ一ゆ冠者を索ね一ゆ養母巴の尼ゆあゆとのあやもせんと草枕旅ゆ日を弥れども親ゆ友ゆ竟ゆ得あゆ。當時又ゆ冠者の父蒲殿ハ平家を西海ゆ討ゆ式四國九州ゆ年月を累ねゆ。然れば彼地ゆ恩顧のゆ是ゆゆとゆ冠者ハまゆ式心當ゆ遠く西國ゆ走ゆ。東欲南欲漢天竺ゆ式北で遺ねば西ゆ達ん西であゆ。あゆ式ゆ。六十餘國を遺ゆく巡ゆ遺ゆこゆ。津ゆ。衣縫ゆ針磨ゆ吉備の中山ゆ。潜ゆく華洛を過ゆ。蘆ゆ散る浪速海山の名所舊迹

浮槎道人
珪浦義秀浮槎道人
あり

ふも心とゝろゝで四國ふ渡り筑紫ふ到れ西九箇國を徧歴せゝ日肥前國
珪浦のゆとゝまふく浮槎道人とゝ名ふ一老翁ふ邂逅ふ渠ハ岡田冠者親義が
庶兄ふ倍田二郎在義とのゝの事ゝ木曾殿近江の粟津野ふて戮
あゝ比在義も亦罪を鎌倉ふ得て鎮西へ出奔し商船ふ便船して
海外ふる國々を巡歴すること數年ゝ帰朝せゝのゝまゝ萬國の地
理を推究て蛮語を通曉ゝ事ふ義秀去て歳の秋の比砥並俱
利迦羅谷の邊ふて彼人の吊岡田親義が遊魂と問答して其白骨を
瘞しとゝまいまゝのゝ紙告ふ及びて道人感涙を堰あゝ只管ふ紙
筆ふ留めて昔を語て今を論じ且その經歴し外國の風土物産ふ
ゝまゝ迄説示ゝ精細ふ問学せゝ事ふ志ゝて杖を駐る程ふ経
任誅伐のゝハさゝも時夏が賊中ふ走ゝる足利左典厩敗軍のゝ迄ふ
遭ふ西ふ伝のゝゝて人の噂も七十五日過て吾倅の春ゝ迄ゝ今茲正月の初
ゝ吾黨恩赦のゝ街衢ふ檄を掛られ歎ゝ事ふ彼時
夏が好悪覚て義邦赦ふあひゝゝん必故郷へ還ゝ事ふ今ゝ
外ふ求んゝて下野へ帰へ舟ふ浮槎道人ふ紙告て辞し
別ゝその月の望の比帰東の杖を曳て華洛ふ出て
又ゝ奥六郡の賊乱起過て信夫荘司ハ戦殁その背冠者義邦
夫婦ハ賊徒の為ふ生擒ゝ其ゝ戦ハ如此ゝ箇様ゝ風聞
ゝふ吉見冠者ハ奥の信夫ふ身を寓ゝ僅ふ知ゝ事ふ
甲斐ゝ獨逸感ゝ堪ゝ猶も虚実探ん為ふ華洛を立
去て若狭より越路ふ赴て急ぐゝ二月の中澣ふ
陸奥ふ到て鎌倉ゝ軍勢下向ゝ賀藏人光仲駿河前

司廣綱両大将とうく再く経任を討ぜらる。廣綱の名へ豫てより聞
光仲のみ定まるねば。をうく人ゐこまれ向の小智る者あり答く云そへ廣綱
の背ゐく此度追伐の摠大将なるこの人初乃姓名を温子井平と呼
ぶ。下司なりと伝へ聞り。虚言ゆへあるごといへり人の僥幸愛達へ
和漢今昔珍しかまぬ驚くべきなるねども彼井平へ冠者を捨て獨
栄利小走りこ狡交遊の義信孰ふるあるを憎むべく親むべからず。
まつをゆく光仲と井平を同人なるべし知るべきなるその陣門へ一
度び音づれせぬ。なるこの地より身を潜めくその軍略を見くるふ
渠が龍蛇茂林の戦ひふ暴道時夏を撃走らしく鎮守府の城と攻
取りしかくく平泉の柵を攻んとく泉川の上まていく経任ふうち
員を見ども更ふ計まく経任ゐ大軍を追ひ走らし進く柵を囲ぐら。

速ふ攻撃ぐしく徒ふ日を過を程ふ士卒を時疲ふよまく。病死とるの
少くまを且その兵粮竭さんとなるゐ倘今賊徒城戸を閉ぢて撃て出
ゐのるゐ渠くこを拒んやまを他の資を借を獨柵中ふ潜び入く。
冠者を拯ひ出さんと難くもあらねども且くゐ空しせを他の
功を奪ひ取をを寄るへ柵を攻ぐそへとまかくもあを外乃勝
員ふかづらひて輙鮒の危急を拯ぐへ冠者を枯魚の市ふ賣られん
さまへ今宵更闌く柵中ふ潜び入り。ゐ友をも拯ひ取べく。経任を撃
殺しく寄るふ眠を覚さんと必のふけまへ甲夜の間ゐ。ひそう賊柵ふ
迫つて斬土の浅瀬を索る程ふ。そをを冠者の内室医姫とかくんを
拯ひ出りそのゐへ如此ゐるゐ。かくく又そのほとりふ少く和殿達ふ環會へ
意外の歡び奇なり如ものを扨も三月の上旬主の使を求へく。

鎌倉へ起給ふ。又嗣忠へ書を為ふ越の稲向許数々く主の先途ふあるべ
き。その頃故あ〻巨細ふ侍べ〻さう余後のつゝいゆそやと同じく
廣光床几をえらのち変既よりそこく某へこの二月鎌倉へ使せ〻ふ。
冠者の外戚足立盛長ぬ〻ハ〻ぬる正月下つゝこふ為まゐらつその子息
景盛ぬ〻ハ内室つゝふより君の御氣色を蒙すく籠居の折ふれば。
密旨をヤ〻へくふ〻ふ。こかくする程ふ奥の凶変ゆえ〻べ慌忙死立
ゑ〻ふ。館へあどやこゝく焼亡まくぬ〻ゝさゝん。その人この白骨成のこ
とめ〻ふ。送根ゆうこゝまゝども。大厦の既ふ頽まて成孤匠の興を死ふ
あくまで。さゞまゝ冠者も置姫も。ふ賊栅ふ存命ゆうと侍べふ聊慰めく。
彼此ふ立ものびつ。駒形村のほとりふ。標吉郎嗣忠が越ようやかり
まつりよ逢ぬ主の先途ふあいさるべ。憾を送ふ説盡〻く竊ふ興復乃
大義を相譚ふ程ふ賊徒誅伐の鎌倉勢。たゞ當国ふ来著せそ。
抱大将光仲ゝ舊名井平ゝと称ふ風聲を侍べくあるゝ渠が立身ゝろ
得べ〻ゝ去歳の春下野ふり冠者ふ俱〻ゝ北国へ走ゝんゝろ折中途ふ
仇を防ぎつ。要時冠者ふ後ゝとも加賀へいるゝ侍べふ。廣綱ぬ〻乃
聟ふ為ゝ。その後まゝ成幸ひふ。東へ赴れゝるふそかれば是不義
の友為り。縱豫讓ふ恕ふ倣ゝとも不義の人ふ従ゝ。とゝふ為ゝ。
嗣忠も亦同意為り。只この二人が微力を盡〻く主君ゝ帰ゝ救ん
とゝく。賊徒の隙を窺ふふ彼斬港のほとりゆふ要害をこのゝくて。用心
等閑為ゝ成灰ふ侍べ侍べ〻べ渉ゝ浅瀬のあゝん狩と彼処ふ潜び近
つゝく。和君ふ環ゝあゝのゝ為ゝ。聟姫ゝ救ゝ〻ふ曩ふ加北乃小松
野ふて。おのゝ受ゝる再生の恩ふ倍せ〻欲べ百萬騎の躬方を沿〻

よりてこの用頼くゆと恵を謝し義を述べく誠あるべと忠臣の心の憂ひと歎びは嗣忠も腰刀をとりて共に跪れ目今江氏のいろきし如く曩に某使者とべく越の岩上に赴つあべ稲向夫婦はさて浅良井の刀自母子彼二三は対面せしは家の内皆悲ちて友鶴刀祢は去歳の秋産帯と鮮しとの出生はいと健なるとの母御は月ごろのわらひやうにて産後の侭は春もやごと床揚せもと笑えしべ面語ゆは及ざしも彼も此も朝夷なの乃信ある死が不楽しとくそのと式のこと旦暮よいのべく出ぬのべ折べく本国の大内夏とも彼地へも使のえはをまべいべべ盡さを問べ死るもいべべ果さべ遠く岩上を辞しにとろ余後のるは知る由のいろとと友鶴刀祢の病著も今は癒とのひん然べば仏とくべしさく已がうと通ん笑も及ばせのひるめ此度寄はは力を勢て鎮守府の城を乗取りし城戸水草の西義士は共は信夫の老臣ろまし守詮昌甫が子宗ゆべく去歳の秋より正法寺の枝城を守べくゆの死又某を彼家新参れのはおまべ件の西義士と面識るまべかくまべ彼輩を憑べく寄なの陣は加て微忠を盡を由もあ。父はまべとのひるべ舊里るまべ駒形村は要時隠れく忠もかくも謀をるべやとく潜びく彼処は刻く折鎌倉より加て来べ。江氏は仇べく逢ひしべ遂は寄なの陣へゆを某は彼光仲の人とのべ死知るめたるねど使べくぶ如死は聊るしよりべく江氏と同意しべ夏の今霄は及びしは寔に附驥の福ひも況べ筐姫を救はし時宜の相應不思議とのべ。抑姫べは何のべ俱しまるせべく何処に潜せのべやべん鬼神とはべも側べべ死なは段はしそとひみべ。安をべ傷を足べまべ廣光はべろを洗て点頭ゆべ義秀はべち對ひ喃朝夷主筐姫を救はし。夏の類死使はべべ。

再會の歡しなと自他の物ゝ言ヨゝくいまゝ見參ス暇ゝ乞今宵
俄頃の隱宅ゝ近ゝ寄ゝ問バ義秀含笑ゝ姫のゝ入ル
ゝ今宵見參せんぞゝ既ニ人を傳ゝ安居の里へ送リ
けれハ。蜉蝣ゝ刺ゝ入ハ然ハその所以を說竭さんゝ廿町
あまゝゝ荒田舍ニいとゝひくゝ草菴ありゝ老ゝ尼ゝ只ひとり
ゝん住ゝけゝ過ゝ日ゝ彼知を過ゝ柴門を敲ゝ進ゝ入ゝ
湯を乞ひ。と叮嚀ニ歎待ゝ舉動賤ゝ由緒ある人の幸ゝて
ゝ果欲と推ゝ奉ゝ養母のゝ胸ニ浮ゝ不信の信ゝ起ゝ
ゝその素姓を問ゝニ渠ハ秀衡が時平泉の柵ニ置ゝ某甲が女
ゝ泰衡滅亡せゝその父も戰死ゝ親の菩提を吊ん為ニ祝
髮入道せゝ。ゝをゝ衣川ゝ義經ゝ始終のゝ箕姫のゝ迄も

ゝく知ゝ今の經任を悪むゝ鬼畜ゝ甚ゝこの後ゝ又西三度彼
ほとゝ過ゝ毎ニ尼の安否ゝ訊ニ尼ゝ一枚の繪圖を披ゝ義秀ニ
示ゝくゝ見ゝこゝ平泉の柵の全圖ゝゝ親の記ゝ
為ニ要ゝ抑平泉の柵ハ文治ニ破却せゝ經任修復て
ゝ抑ゝかれば文治の古圖ゝ今と大ゝ違ゝ又彼柵
の後關ゝ厨川ハ通ス捷徑ゝ路ハ云云ゝ嘗ニ指圖ゝ
君ノ用ひゝゝあゝ進ゝ歎びゝ受納め。
ゝく彼知の案内ゝ智を用ひゝ知ゝ只見のゝ信夫
荘司ゝ戰殘ゝ為体。三ハ去歳の秋金瘡愈ゝ人の地ニ來ゝ
ゝ冠者ニ環會ゝ馬養標吉ゝ仇擊ゝ且その鎌倉と山岩上へ
使せゝ。ゝ知ゝ說示ゝ。浮世ニ遠ゝ籠ゝ居て知ゝ

人のうゑさとく知るものを故にそあぐめ偽成りく俗ふ諂ひ奥を催を
ものをぐ。とそのふるまひ疑ざるを知かく今宵和殿達ふ環會いよ成
笑けば彼女僧が言いよく信あり。千里眼を得るゆめ狡順風耳ゑるる
ものの狡亦是不思議の人と分ぐ。さまべ亦きのふ泉川のこまとゆくるる
ぐを藁二郎が下野ゆ来るふあひぬ渠へ去歳の春の季ふ稲向許
辞しをく。赤貝へ還まるる三二をよく知りつゆ。ゑ此度初て笑ふ
現彼藁二八匹夫なるとも。その忠心を世の人の及ざる所あり渠も亦その
故主の賊徒ふ擒れさまと笑をく驚ゑと歎くと大さまるまぐ。備沼脱れ多
まそその骨あるとも拾ゑとく今暇なき畊作を人ふ任ゆ只へひろ路次
いそゆと来るとのゆ。そをも冠者の物吝せぐ難ふ臨ゆく銀まゆと渠
ふも頑取らせる。恵を忘れぬ由ゑ多人へヨく沒ぐ。これも

亦その愚直ふ愛つ旅宿ふ伴ゆく既ふ機密を告ゆ用るるもあゆ
とく今宵も竊ふ招くを来るとへ遣ゆ藁二郎が背ふ負しくゆ。
尼が莽へとく遣ゆぬかるとへ懸念せるをあるとちゆく大功を立るとのふ
智術を感ぐる両義士をゆ。ゑ膝ゆち敲ゑ変かくの如くるへ既ふ不
測の助けあるゆ。皆是姫の洪福なり。さるゆくゆ柵中へ潜び入る術ぞあゆ
笑まほと再く問へば義秀ハ懐ゆを彼繪圖をとり出く月下ふうち
披ゑ両士もぐく己ゑ見よこの処も獄舍あり。こふ城門あり館舍
あゆ。先ゆ冠者を救ひ出く後ふ経任を軽ゆるべ。ゆ是ハ安房の海辺ふて
人と移りぬる甲斐あるく水煉ハ人ゆ譲らぐ彼ゑゆまるる散斬ハ水底ゆ
出くを易かるゆ。ゆ是とも西士の為ふ篋姫の渡しゆる盥ゆそ究竟のもの
ゆ是曩ふ引鈎索とりく岸ふ引著け石ふ繋ゑ笛ゆ是彼盥ゆく是ゑ

べし。その餘のこゝ如此こゝあるを固様こゝと説諭せば廣光嗣忠ゝもそく勇ましく共侶ゝその繪圖をつくろその武略ゝぞ従ひ多折ゝもあれ遠き寺院の鐘声又杳こと苦ゝ義秀耳を側さゝ是豫てこゝ計る所今霄丑三の比及ゝ柵ゝ潜び入ゝとあり。いとも短ゝ夏の夜ゝ長物語時を移ゝ。既ゝ時刻ゝあるを抜ぬ西士ゝ軽く打拾せゝられ甲夜まで。この処ゝの拠立あるゝ知るゝ。この堂あゝを去ぐゝ。ゝゝ圖らざも足を休めゝさそゝ談合谷を得ゝ。祭ゝ神狩佛狩と頭を回ゝ。遠ゝ。ゝめそゝ。ゝち驚ゝ。ゝ嗚ゝ。ゝ。要時黙禱ゝ。退ゝて又左右をゝゝ。西士ゝ。ゝゝを見ゝや。この堂ゝ。ゝ荒ゝ。ゝも本尊ゝ不動明王ゝ。ゝ安房ゝ在ゝ。ゝ養父の讐を撃ゝ。ゝ莊司嚴の不動堂ゝ夜をゝ。ゝ素懐を遂ゝ。後又加北へゝ。ゝゝゝゝ砥並山を越ゝ。ゝ俱利迦羅堂のほゝ。ゝ岡田親義ゝ火の為ゝ。ゝ怨敵を鎮めゝ。ゝ今霄又この不動堂ゝ同志の西義士ゝ。ゝ友の為ゝ仇を撃ゝと欲ゝ既ゝ。ゝゝゝ感応今亦空ゝ。ゝ加旃俱利迦羅山。不動堂ゝ通夜せゝ。ゝ假寐の夢の中ゝ。ゝ養母と一三と送ゝ。ゝ白骨を霎時爭ひゝ為体。ゝ鄉高ゝ三二標吉ゝ知らゝ挑ゝ。ゝ相似ゝ。彼ハ夢寐の妄想。是ハ不測の再會。一虚一實神明佛陀の孝友を慰め諭を欲。ゝ又養母ゝ。ゝ。ゝ亡母の。ゝ像見ゝ送を。ゝ價の重宝俱利迦羅丸の一刀。魔を鎮め妖を攘ふ切あぢはふゝ。ゝ。ゝ縱横任幻術。ゝ風を起ゝ雲ゝ乗るとも頭打落ゝ。ゝ。ゝ勢ひ。ゝ。ゝ試る刃尖ゝ鍔除ゝ。ゝ。ゝち目成ゝ夏。ゝ寒ゝ刃の光ゝ。ゝ孰を月と

見るまでに閉じたるまなこ見開き。廣光嗣忠に向かひこの名刀と感応に耳を瀆し目を驚かし共侶と嘆賞し齊一堂内に進み向ひて志願の旨式黙禱を當下義秀は腰に帯びたる刀を解き廣光に渡し舊の塹端に近つけ又両人に耳語示し合ひ索を携へ下りて盥の内に入る。左右の膝は外に餘りて全身蓋し大なるまでもいと輕げ坐すとも沈まず廣光は二百斤軽しと六十四斤動静機に合ひ軽重意に任せ怒る眼を回すと見れば猛獣も忽地斃れ咲く眉を舒ると見れば稚子も早懐しとぞ又こは今の義秀も古傳ある勇士にて密語点頭つ共に感嘆ありけるかくて義秀は盥の縁に鈎索をうち掛くるや竿を揺りて溝門の脚より槽入りて向の岸なる石磴に登りて別に一條の鈎索を解き出す。楚と盥の縁にうち掛け初の索を引動せば廣光に示すその意を悟りて索を引く徐ろに繰り出せば盥は舊の岸に寄りて第二番に廣光は索に携へて岸を蹴り盥に入ると義秀の所作に倣へり果て初の如く向の索を動せば義秀躍り引き寄せ引き寄せ廣光は竿を揺るに及ぶ遠くなれば溝門の内に入りぬ第三番に嗣忠渡りぬ。その時義秀廣光の如く既に渡り果ては義秀は両條の索を水中に投沈め盥を石に打當て碎くこと。

を捨てけり廣光嗣忠驚きて竊に其の故を問へば義秀うち含笑ひて。両士の為めぞ。吾們今との柵中に入ると雖ども冠者を救ひ経任を殺さんと。若し吾黨一の城戸より出でんとも二の城戸より入らんとも隨意なるべしと又奚ぞ盥を用ひんや渡り果て盥を碎くに

古人船を沈むの遺意こさらはもどと密語ず。廣光も嗣忠もその
膽勇に感服せり。折から柵外に戦ひあるとき聞くて鯨波遥に伝へ
賊兵八大勢なるに一二の城門に聚合けんとすらに人氣ありて義
秀を先に立て獄舎の囚人を逃れ義邦の繋れしを解かんと
思ひ難き傷と足に守屋あり。裏面に賊卒四三人いまだ寝
せざる守りを。義士ホがそのうち窺ふ怪しやと認めんにふく棒を
引提げ走り出んとする知を廣光嗣忠立塞りて門邊に二人を砍仆ず
残る一人驚死おそれて潜ず逃さまに声を揚んとする程に嗣忠
追蒐て撃留めその間に義秀も獄舎の鎖を揉折て義邦を扶出
せば廣光嗣忠進みあるくて月影にうかがふ言葉ありて共伴に
涙さしぐむばかりなり。義邦は忍ひ泣くて技出しる人を誰と

思ふに絶て久しく義秀なり又廣光嗣忠も相隨ふ来ふそれ
夢歟とぞ思ふに蓋てや進みるに義秀なり是で声を低うし
者恙なるまし欲ふ又人のうしに後に説とも遅に既にあらん
身を救ひ得るまじ又経任を撃んと欲をさらば冠者はこの月あり縲
縛の中に疲労なるまま働ひ得るならば廣光を副てこの折よくは
時夏を撃取て怨を雪めよ又彼処も獄舎あり何ぞ擒れるとも
同じ義邦遜を改めるひ朝夷ぬ廣光嗣忠共伴に潜び
入まのひ名神出鬼没とのぐ死のき再生の恩須弥より高し又彼獄
舎に擒まれの共ないぬる比寄ゑ泉川の敗軍に生拘らまる雑兵
三四十人のやあるぐらん縦彼を後へとく賊徒のまの比れにあ
九牛が一毛なり。あん外萬夫の勇あるとも経任を撃取らんところと

肝を陷めば義秀仰て芝介とうち笑若夫虎穴に入らずんハ孰か虎の子を
獲んや。されかのごとく処分あり。心をゐ苦しめ多ひそと回答く件の獄舎に
却て又その鎖を捩断く。簡子と推開く俘兵ホ互ちに對い汝ホ驚て
怪むべきまでされハ義邦の方人ゑ今この柵を火攻く経任を毀取ん
と欲をされバとく。脚腰弱りし汝ホが力を借んとのホあらぎ。汝ホハ彼
知るる。林の中ホ躲聚て如此ことめく賊徒を欺て却ぶ柵ホ火を放とゑバ。
脅一鯨波を揚よ。この外ホ要なし。と言古せるとく説示くと懐中より續
ぎ紙いく巻ゑ取出ちその紙の端ゑ糸を結びさげ。糸の端ゑハ小石を
著く。そのとき遽ちよ。俘兵ホも陷ちるべく扶出されるが
歓しさホ一議ホ及ばず受取く衆皆林の中ホ却て義秀が教し如く
紙を梢ゑ投掛ば糸を樹枝ゑ操り笛を垂る紙ハ風のゆゑく翻離と
閃ちく軍兵駭籠る。旗のとくホ見ちく多。その間ホ義邦主從八命めて
ときき再會の歓びを述意中を出る。廣光ハ刃ホ両刀のその一刀をとりて
ちまち義邦ホ進ちまれハ嗣忠ハ獄舎口ホ樹る短鋒を擇取く義邦と
廣光ゑ遮ちく。抑この獄舎の邊ハ左右ホ土堤あり後ゑ林あり。軒稍
盡る処ゑ。要のゆゑ入ちる。況曉ちる比賊徒ハ多く柵外ホ打出て
寄手と戦ホ最中なれば。これを知るあるべけ。かく廣光ハ要時ゑ主乃
ちる武ちまで敵の動静を窺ふく一度ゑ驚く出ちそ躲のくる程ホ
義秀ハ嗣忠ホ准備の火薬を分与く。ちや彼此ホ火を放ハ林の中ホ
俘兵ホ。その煙を望く暗號を違ば竹を素一本を動く鯨波とぞ揚らけ。

中輯第二十八

一　関乃攻鼓
四　孝子の怨刃

これら先城戸四郎武詮ハその夜四更の比及ふ十四輛の兵粮車と隊兵三十名ふ推せんく潛ひかゝる体ゆゑく水草太郎五が陣門へ牽ゆゑく如近つゝゝこの時平泉の柵ふハ遠見の賊兵ホ之ゝこれを見ゝく一の城門を守ゝる珍浦五十五六ホ告ふけゝバ五十五六ホ驚ゝ原来寄ゆの兵粮竭くゝ外ゝ求めゝゝ彼の食ふ飽ゝゝハ躬方の為ふ害あらんいで踴散らくゝゝ敦圍あくゝ歩卒とりて経任ふ報知らせ城門を颯と開ゝ馬を真先ふ乘出せバその隊の賊兵二百餘騎驀直ふ走出ゝる勢ひ群虎の羊をゝゝく相爭ふ異なゝゝ水草太郎五が陣門を横筋違ふ推隔ゝく突然ゝゝく競ひ蒐ゝ武詮ホ之謀ゝ如く須臾も拄ざゝく車を捨て逃ゝゝ時ホ陣門の内金鼓大ふ起ゝく水草太郎五昌之百五十騎を率ゝく殺て出賊軍と推隔ゝく車を引入ゝゝと當下賊将五十五六ゝ三百餘騎を引ゝけ。その半とりく車を奪せゝゝ昌之が一軍を遮ゝ留めて突崩せバ昌之が百五十騎立足もなく偽負く陣門ゝ望て退くと三反なゝゝ追捨ゝ。その間ふ一隊の賊徒ハ武詮ホを打散ゝく。既ふ車を奪ひゝゝ五十五六ゝこゝ賊推させゝく柵ふ入ゝんとゝる程ふ昌之ゝ又士卒を進めゝく追携ゝゝく跟へゝんとゝと追へバ賊徒ハ取ゝく返ゝく擊靡けくゝ引くゝく昌之再び逃走ゝハ又寄ゆの本陣ふ鯨波大く發ゝて摠大將ヨヌ賀光仲佐味下河邊を左右ふ備へ三百餘騎を魚鱗ゝ立ゝく徐ゝとゝち出ゝゝ。賊徒も亦これを見て跖犬吠ゝ又三百騎の賊兵を繰出ゝく珍浦五十五六を翼けゝ車を城門ふ引入ゝゝ寄ゆの陣ゝ柵を打ゝと僅ふ三四町ゝ光仲ハ柵中ゝ。

賊徒の加勢出でる成るに敢又戰ひを好まず。水草昌之が士卒と合
しくその勢四百四五十騎一の城門を推あせく。御方の暗號を俟う
けるかと程ふ城戸四郎武詮ハ勇卒十名と共ゑ。袖識を掻投
乘こく賊徒の中ゑ雜りて城門の内ふ入る程ふ経任を初り。腹心乃
兵五七名を従へて。登こく西南の城樓ゑあと千里の外まで隱も
なく鮮明の月と燭ふ勝負を目前ゑ直下さる。戰ひの為体まろ
こく。躰く密使を走らしく。五十五六ふよいろ寄ふ夜を
あかく潛ふ兵粮を入れと形ばかり一歩も出ず柵ふ遠近陣營乃北月
あどり。牽入れと成ふ。柵ふ程近近陣ふ入れとせ
態と敵ふ成らせん為。且その車究めく輕。何とあるまハ車の數を十
四五輛ゑ推ゆ。あるのハ二十人ふ過ざるべ。實ふ鞍の兵粮を責

のぐ。こんあハその軍一輛毎ふ四人が力を勵さぐハ輙く動もとハ沿ぐ。
されらの理りあく推とハその偽ふ成るのこ。その詭計を行んとく紛
れく柵ふ入るのあべ。汝ふ成るまハ。
旨を伺ふ。五十五六ゑ。その意成ふく。摠軍柵ふ入る俟ふ一人も動
ず散るこ成許さぐ。みづから声成ふ立こく。衆人靜ふ羨れ。
將軍聰察睿明。今この中ふ敵の軍兵紛入たる成ゑ。さぐハ
その車ゑハ真の兵粮ゑ。ざるべ欲藁嚢を解ハ紛明あらん。
拄るのあべ。有成ハ生拘れと。高ふ呼ばハ兼ゑ。而て賊卒
鞍群立こく。或ハ藁嚢を引落し。或ハ刃を拔金こく。切解んとする程ふ武
詮ハ計略の覺れる成ゑ。此三も擬議せず。刀を晃と拔閃こく。臂
近ゑる賊兵を。ずんと砍倒し。五十五六を斃ん。血刀ふ振り

走を選ばず衆賊齊一驚騒をなす。原来癖者なる鼓笛人と推隔立累り。彼ら此らと混雑しなく同士鼓をしなければ彼十個の勇卒は武詮が力を勢しなく或は進み或は退き或は顕れ或は隠れ千変萬化乃術尽きを知らず必死の大刀風と賊徒へ向かひ辟易しなく鼓をなすの数をなすこと五十五六吹又は一二の城門を鎖固めて八方に眼を配り奎を揮て進退せり。これゆゑ賊の大勢稍武詮が十隔廿重の囲を追詰め攻めなば武詮弥高が手兵とも五十五六人を吹又貝ぬ縦項羽が勇あるとも脱るべくもあらざるに面に鮮血を注ぎ死骸の上に伏累なり陽没なるべくぞ居たりける程に光仲も一の城門に推寄せなく武詮が暗弱を侯に忽然なりなく後の方より馬埃月を曇せ鼓の賊軍ひで来まり是則別人なるべき賊将鬼六猛虎ら七百餘騎を二隊に備へなく東の城門なる推出しなく其の一隊三百騎ばかり陣営に留り守る。寄手の壁なりなく遠く後方に備へさせ己れは四百餘騎を率なく光仲を駆んとなく塹を選ばなく近つけなり。光仲遠ふこと能はなく驚噪し。原来己れ謀就ぎなく武詮ホもさなき整れけん賊徒なほなく後を追ぬ前なりも亦駆なく出なべ己れ以なく脱るべ柵なる敵の出ぬ間に疾駆散なく退けとせなりなく備を立更せば高吉昌之士卒を進めなく箭を射ちぐ双をなぐなく賊軍の真中を推通んと戦ふ程に五十五六吹又裏賊を引卒て城門を颯と推開せ光仲の旗さ死人咄と嘯なく突蒐ばば寄手へ前後に敵を受て忽地ひきなく靡なく。駆るなめの少なくぎさまけれども高利へ柵を出なる敵を逆へ

且く挑戦ふ起る。素立て弓癖ある者頻ふ乱れて備をなさで後陣のくさゆへ鬼六が一軍まとまれなく乱れ沼く揉合て攻たれば水草下河辺一隊の軍兵いろぎを返巡て又光仲とひとつふなる。賊徒さのよく捉ふ集て駐立て撃んとせば義は伏を恥知る寄ふの士卒へ豫てより。今を最期の軍ぞと思ひ決して射ても突ても撓まを去らぬ引組て刺ちく推伏せり。推伏せられ頭を取るあり。取られあはいかも烈しく戦ふ。されども賊徒へ多勢のゆへ新隊を入れ替へ。駐隔て推包む。光仲を撃んとて前後より競て蔓る。光仲へ弓を馬に受て。遣違て馬を巴の字ふ乗違て近づく敵を切拂ふ大将既ふかくの如し。士卒へ若戦せざるもなくを先途と防げども入替る兵ども弓折き勢ひ穴躬て又替る者少くて脱るべくもあらざるを光仲へ憖ふ賊のゆふかくんとて透もあるべ馬上より腹を切んと上帯へたりやうに掛んとて折て柵中ふ猛火燃盛て。火燄四方ふ散乱て鯨波遥ふ渋て。あるるを素肌武者身長凡六尺許。金剛力士の暴れ如く大刀を真額ふ抜翳て。獄舎のくさを走て生れ出ぬ。吉見冠者義邦ふと断金の友垣結び。朝夷三郎義秀あくふあまを経任ぬと呼ひけく。二の城門ふ聚合る賊兵ふ真中へ雷霆の落るぶ如く。真一文字ふ走入て砕仆し踏殺を力量早技萬夫も前なく。瞬間ふ数十人の首地上ふ散乱て。散へ彼此ふ横ふ投る算木ふ彷彿たり。是のこなる嗣忌へ義秀ふ役のく。鋒を雷電のごく閃て。驚騒ぐ賊兵を駁突伏せ敲散せば。義邦も亦廣光共侶走て出く名乗うけくおのく奮戦突戦を。

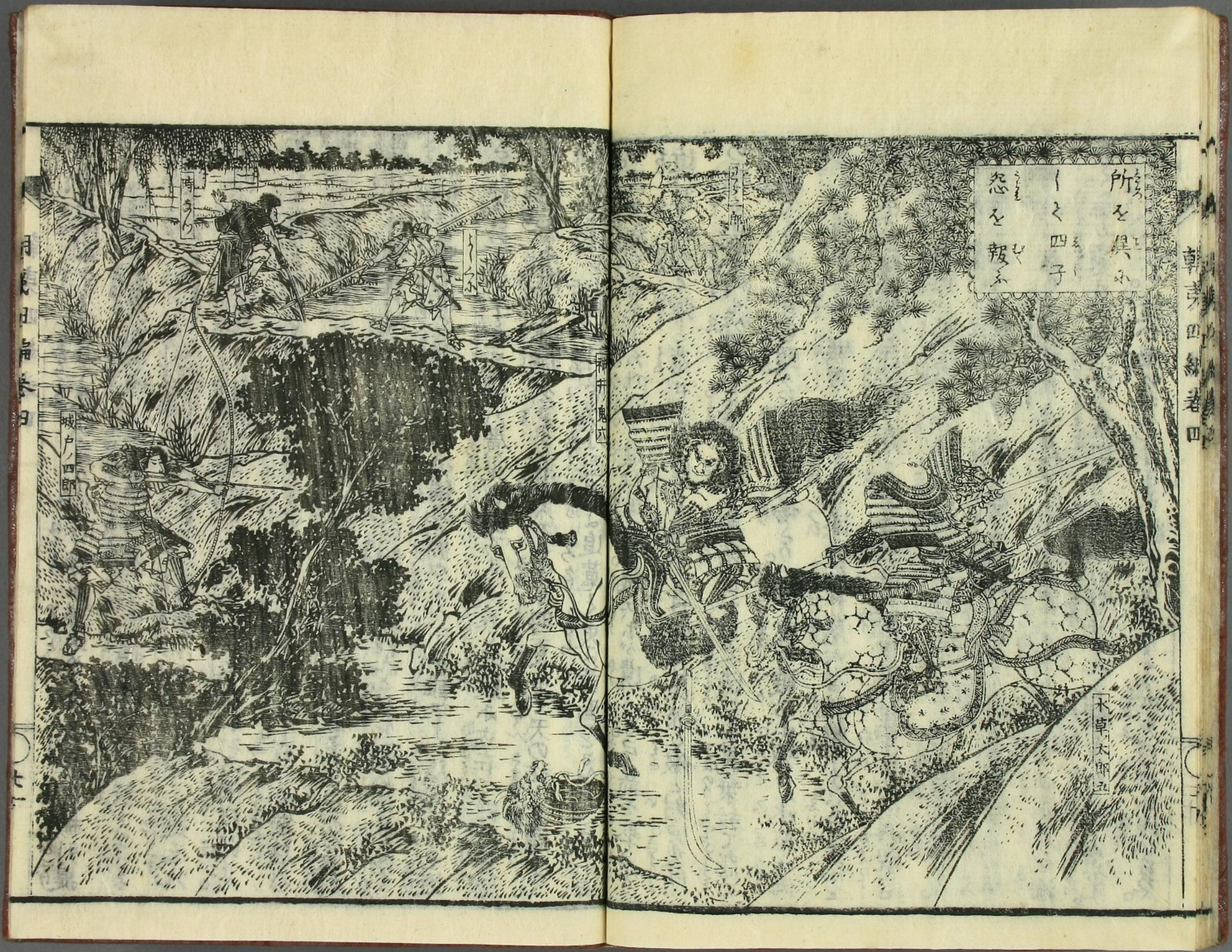
遥あなたの林の中より三四十人の囚兵ホ竹を斧にて樹を動し鯨波を揚
るゆ暁の風烈しく兵火の勢ひ甚しく是首の守屋彼首の築垣敵となりて
燃上るべ敵射方の際をもはるる二の城門戍の賊兵ホいよく驚
よもしく騰とこへ柵内より大敵あり天ようや降りそん又地より涌うん逃よ
処よと叫ぶべく辟まく推合衝倒さを踏れく死るも多かるべされば又
城戸四郎武詮ハ陽殺をもさく必ずを脱る折るくに駆よく先んとく且く透を
窺ふ程ゆ賊将五十五六吠又ホも既より柵外より出ずるも一の城門を固めるる
賊兵内よりもとるるべ車ゆ近つくともるるるべ御方の勝負いゆあるんと獨
よろ武若しめ る折くゆ柵を火攻しく内より御方を援るあり二の城門
賊兵ホハとるゆあるゆ駆ゆ散さるまく火燄頻より飛迸る一の城門の脇城より牽
捨る車ゆもその火縄ゆまく蒙壹裏の火薬費突走るその辺なる賊卒ハ
面を焦しゆ足を焼まく矢庭ゆ死るゆの多る衆賊ゆるゆ駆死遽く下
覚より城門を開くつ皆外面へ逃んと武詮これより力を得るく岸破と起く
血刀うち揮り煙の下ゆ殺く廻るべ度を失ひ賊兵ホハ敵一人ともひもゆ
ゆよ奈まく逃るとく跌くゆハ朋ゆ踏れ後くゆハ武詮ゆ及ゆ命を隕しる
かるる程ゆ柵外なる賊徒ハ件の変ゆ駭き原来野心のゆあまく内より火を
放け攻るぞや内外より敵を受てハかるるゆ且退るく後ゆて敵を殺め火
をも滅さめ退けやく と相喚叫ぶ勢ひ更ゆ多ゆ似ぞ勝誇る氣弦屈し
駆果るべ死敵を捨く退き入んとする程ゆ内より遽く逃る射方と迭ゆ
敵と僻認く退くゆハ城門ゆ沿へるぞ出るゆハ進る沿ぞ又同士駆戦く
けるべ寄るハ枯稿の雨より活れ轍魚の水を獲るる と亦何ぞ異なるべ死光
仲ハ昌之く神井鬼六を逆駆せ高利高吉共侶ゆ忽地備を立る

退難き賊兵の後方より推蒐く拊切ゆぞきうけ。當下五十五六吠又き。射方を退らせん為ゆ斬土梁よ馬を駐めく近く敵を切拂ひ要時ハ拄さうけ。こでも寄ゆの大刀風尖くく。ゆのゆべくもあらざまバ吠又ハ咏ゆく纏つ戎牽回ー城門ゆへくんとする処戎内よ俟る武詮ゆ双ゆ馬の脚を拂ま真逆さゆ落ーゑ佐味高利あまゑ戎ゑく瓶ゆ似くゆ馬を進めく起んとする戎起ーも立を薙刀をとり伸く細頸丁と打落せバ珍浦五十五六ゑ久へまく驚ゑおそれく。柵へハ沼へくを透を窺ひ鬼六と一隊よるくんとする程ゆ下河辺高吉賊將と ゑくけまバ矢庭よ馬と馳よせく。五十五六ゆ引組く操伏んと挑まつこまゑ彼鐙を蹈外ー西馬ゆ間よ撞と落てし上ゆあり又下ゆあり。且くハ挽合つ高吉竟ゆ乗ー懸く。押て頭を取うけるさまゑこの一の城門のやうゆ拄る賊兵るくあり。ゆまゑ先仲ハ又更よ経住を撃取らんとく。煙を犯ー士卒を進めくるや柵中に騎入くり。そゆ中ゆ水草太郎五昌之ハ壍を距ると一町許。絶ゆ六十餘騎をのく。神井鬼六猛虎ゆ四百餘騎よ駈向ハ面も必ずを働く入る。寡兵なれゆ勇ま。賊徒ハヨ勢ゆ物ゆ。既ゆ柵を火攻せらまく。且五十五六吠又ゆハ一軍いく撃破らまゑ又彼寄ゆの陣営の壁ゆとく備ゆ。三百騎の同類ゆや退死失ーゑ皆十二分の鬼胎を抱ゆく戦んとゆハるくめハるく。忽地よ衝崩さゆ。殺るく逃るあり。寄ゆハ只営追撃ーく。或ハ生拘ゆ。或ハ殺ゆ留ゆ。偏さゆ鬼ゆ。當下賊將鬼六ハ逃る射方を罵辱めく返せくと呼まゑ。共ゆ馬を牽回ーく退死走んゆ。まゑ程ゆ水草昌之佶と又んく。這奴ハ鬼面乃 嘸あゆゑ且その耳隠よ神鬼の二字を識著ーハ見必鬼六ゆくんとんゆも猜ーく。馬よ拍ま。亮賊鬼六何処へとゆ逃るとも逃さんや。されハいぬゆ二月某の日口澤の ほとゆゆく汝ゆ為ゆ撃まゆる。水草十郎昌甫ゆ一子。太郎五昌之ゆ戎ゆ。

君父の讐敵やも漏まじ死刃と受よと呼ばく振閃き薙刀ハ雲間を巻く秋の月の水ふつまく流るを似く透もあらせじ撥刃尖をめくやと鬼六ハ巨刀をのて受とめ引けばつけ入ま拂へば沈く一上一下とうち合る刀尖より火花と散く。

五十合あまり戦ふ。鬼六ハ賊中ゆく大剛のあるとけまへ敵の弱武者なるを見て山及ぶ懸くく打大刀尖く掛声さるのごう犬狼の人を吠んとの勢ひあり。昌之今茲ハ十七歳尚幾冠の齢なるとを武藝勇悍親よ倍く進退恰も倍羅麝野雞の蛇を征まる術あるさぐれ数度の苦戦ゆうく器械さへ疲労れけ薙刀の柄ハ焚毀と折ぬ。大刀を抜くハ暇なるまじ残る柄をもく受なぐ。受なぐ〳〵戦ふ光景いとも危く見えぬ。されば又城戸四郎武註ハ一の城門の内外おく賊徒を鞭撻取つ塹の橋の高欄ハ身を倚く少選息を吹く稲ハ弓を倚まで遥ゆるまるく水草太郎五昌之と賊将神井鬼六と只二騎挑く戦ひ

つ。昌之危く見えしぬ吐嗟と進む足遍よ賊兵ハが遺一る弓箭を取て走り近つ引く弾と発せば寇違ぬ鬼六が眉間を貫深く礙と射る爽所の痛るハ雲時も沼堪ぬ馬より撞と輾落まじ昌之透さぬ馬乗放て怨の刃抜くくを見せぬ頭ハ切てさて揚ぬ。現今暁の戦ひハ城戸水草の両勇士ハ萬死を出く賊軍を殺屠ぬ。遂ハ神井鬼六を相撃く父兄の怨を雪めぬ。武運愛さ壮佼ぬと人ぬ後ぬ感じ。紫下某生再説ニ曰見冠者義邦ハ義朝と共ハ進く賊徒を殺んと迅く廣光ハ後方より主の袂を引とめ剣戟をのく敵を撃ハ分捕功名せんと志をのハ皆是士卒の呼為よ。大将の希ふ所ぬ且君ハ久く囲の中ハ身を淪めく氣力衰へ。ひけん況又素肌ぬく軍馬の魁さんと願ぬ尤殆く廣光。君の名代ぬく隨分働ぬハん目さを敵ハあらざるぬ。匹夫の勇ハ做ひぬ。


所を現ふ
しく四子
怨を報ふ
木草太郎丸
神井鬼六
城戸ノ四郎

後悔其所に立てり。且く恐びあり。と叮嚀に諫止めて。ごろ身に器械引提げて。又賊軍に走向ひぬ不題刀野太郎時夏は文字揃暴道ふを殺しつるごろ。好計を人に知らまく風聞大々ざまべ。ごろ竊に鬼胎を抱きて逃去んとこひしごろ。いぬる比より鬼六が隊卒しく守りこれを見ずその便宜なぞ。かくこの曉に柵を義秀ふに火攻せられて柵兵内外に敗北し。或は亦前後乃城門より逃去るかのもの多々時夏いさく驚きたくいふせまりとこひ。再び思へ時の難義は結句ごが身の幸に支の紛れに脱れんと刀を腰にさしてゆく。里を何処とぞ定ざる俄頃に旅の准備ち賊卒ふが中に雑まりて後関よりぞ逃去りけるこのとれよりも義邪は廣光に諫らまく且く其処に立在て曉を近き兵火の光りに逃去る賊徒を見くあまべ。そが中に時夏あり天の祐と雀躍しく。働くに短鋒を小脇に引著け。外面遥に追蒐く更に前面をはんとてかべ十三日の月傾くく漸西山に入るあり。秦火の光りに隈もなく。脱れ出る賊兵は。たや彼此に散乱し。時夏は只一人。ごろ。曙を北へ五六反走り過ぎんと為る程に義邪も喘ぎ追ひ近づきく声をあり立て賊時夏且く等と喚笛らまくうち驚き後方遥に回顧るに。これを追ふあり義邪。ごろまども外に又續く兵あらざれば。這奴いかなるあり。我をべ。このまく走るもあるに所為あり只一刀に結果くこそ。去年来の熱腸を冷んと。漫に恢ひ侮りて榛の弱木を小脇にさりて刀を引抜き立てりける。當下義邪些も擬議せず。短鋒戎閃りと取直しく。足場程しく立向ひ。時夏昔をいくは汝が親刀野儀杖照時が非道の矢尖に母を喪ひ。これは又汝が為に実の罪人とあるまそに家を喪ひ友を苦しめ老黨にを離別せし怨は今さらいふに及ぶ。照時ぞ。枉死しく復も由なき母の讐天運さらに循環しく汝を撃べ亡母の霊を聊慰むべく。ごろ

韓夷四編巻四

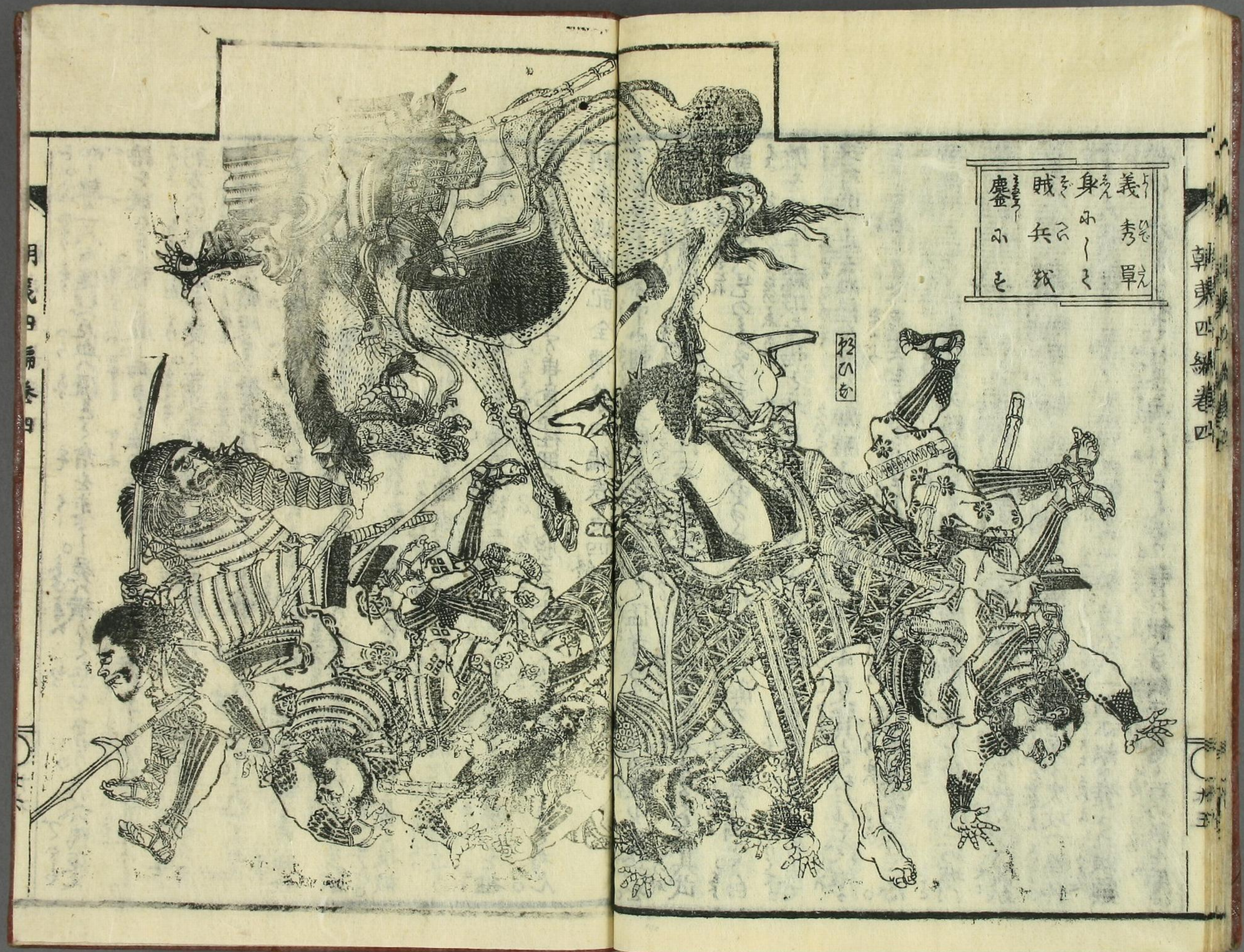
會稽の恥を雪ん終ふ脱ざる天の網冥罰忍ひきらぬぞやと罵責ぬゆあを。呵〻と冷笑ひ物〻しげふ追蒐来ぬる我誰なるらんと思ひしふ過世の業を滅し果てや死そまへ〻し吉見義邦彼佞汝を送し置さこの地を去ん々ふ更足らず迷惑る限りあるふ獄舎を出て花々くと死ふ来る欲振落してられん。念仏せよと嘲るよ嘲くて片とみえぞりふ丁と擊り刃を鋒ふて受留め透間あれせず突出き鋒頭を避て丁〻發石と打合し又奪掛るをも烈死刃尖より發と散る火も燄と見ゆ。兵火の光り天ふ満て昏より明くれ戦ふ人も人影もいづこ隙なれ生死の海とつまるぞ幾遍かあせくへ返しくる。又打かく立騒ぐ去る波なるぬ白刃と白刃いぞ勝負を判ざれ義邦が春の比より久しく暑所ふ身を屈しる寒も漸くふ衰へぬく奈らぬく突出も短鋒をきびく反々立置て運歩眼蹌ふ見てふ夕り告れよ蓋二郎八義邦のそうとて〻らふ我ふあるん。その曉ぐなく醫姫と巷のあらぬふ……

平泉の柵ふ赴げ兵火頻よ天を焦しく。柵の内外ふ敵御方の戦ひ央あらん。心も心よをそく安からねども。矢石を犯して今其処よ人を防ぐ見よしの戒げれ。只柵外を彼此とうち廻りて天を明きふ見ん事ぞ暁の備あふして闘戦鑼を削るあめり火光ふ就てつらくかれども紛ぶべくもあらぬ故主と讐敵時夏之吐嗟と胸且裏鳴てく。そぶれく走里近づけども前面ふ細溝横りて独木の橋へ毀されてり早ふ渡さん術あさふわらりの小石を掻綱て怒氣満てる声を激し悪人時夏これを知るや去歳の春忘野ふて汝が為よ殺されし百姓苗四郎が一子。蓋二郎ならぬを今とてふ事く。聊故主ふ力を勠し共ふ怨を復をそと高かふ呼ぶ時夏こまふ驚る遑て見久ふ我礫と打礫よ片頬をうち傷られて怯むをゐろうと義邦へ短鋒を抗て時夏が右の脇刺

留まり問と苦む声も引せもど傷の株ふ推著てそゞまく鋒を楚と突捨ゆ
ゞ石ハ刀を抜出しく首を丁と打落せば藁二郎ハ歡喜ふ堪ず六尺あまりの横
溝をゞ飛喻て走ゆつ短刀を抜く讐敵の軀を刺徹ー砕切こ今ゞ怨と散
ーこと是欲ーゝと主従が逸ふ西を向ー伏ゝく親ゝふゆ向ー嗚呼密ゝ哉
天の応報果せるゝ人の誠心義邦ゝびく厄を逭ゝく讐敵時夏と殺とり
ゝ寔ゝその所ゝ又この藁二郎が如ゝ只是眈眈の匹夫ゝく大刀ゆゝを
ゞ術をゝゞ敵を征ゝゆゝゞ孝その義ハ世の人ふ鳥ゝ
所ゝ遠く下野ゝ故主を資け讐敵時夏が軀を刺ゝ
ゞ素懐を遂ゝ彼城戸水草の両勇士ゝ又この吉見主従ゝ如ハ聊異
ゝゞ彼共ふ同時ゝ且仇敵ゝの為態畧相似ゝゝ奇ゝ若
この書を繙く省官その悪報を見ゝ警めこの応報ゆゝ

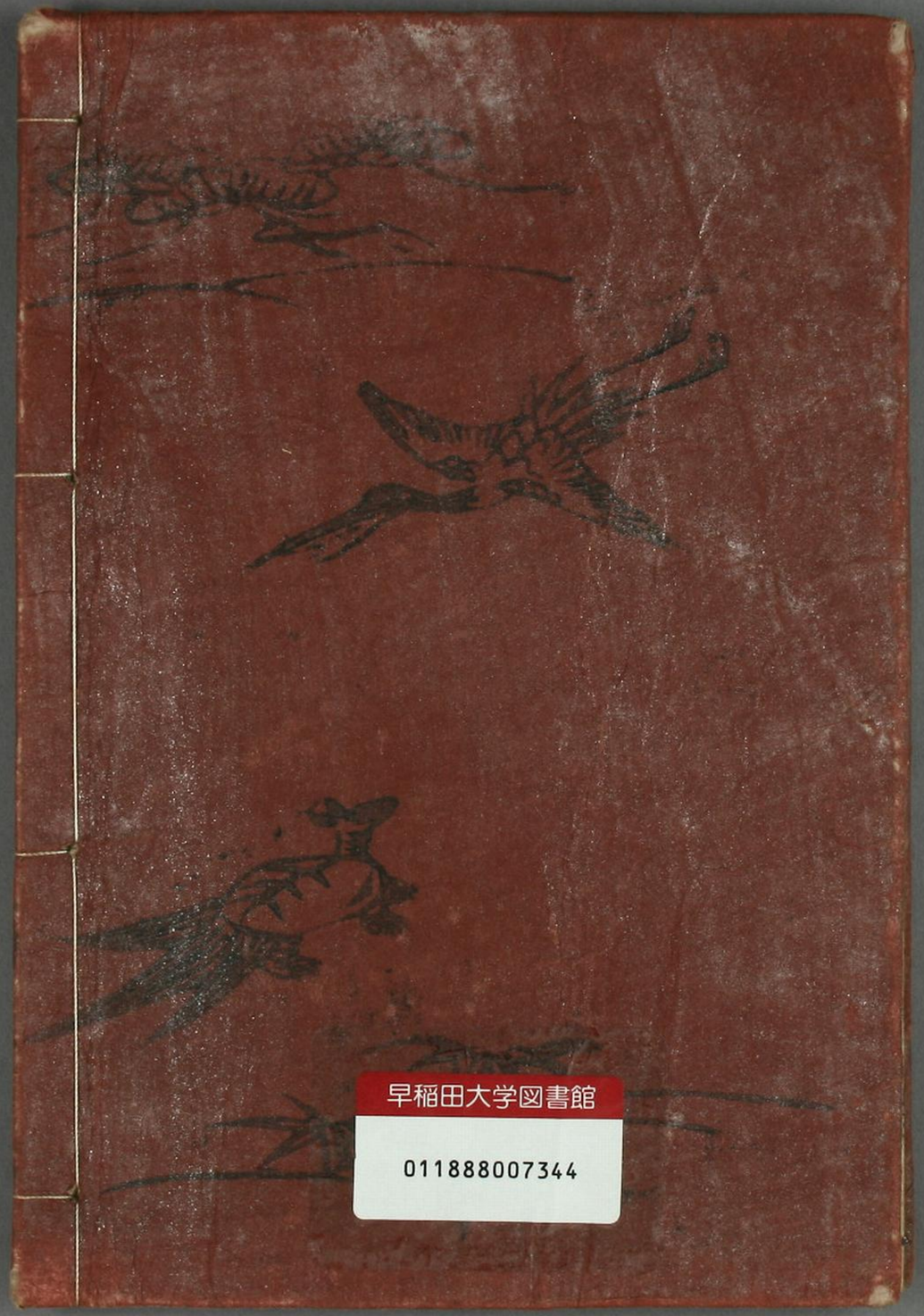
将ゞ時ふ厄難ゝゝゝゝ竟ふ閑運の域ふ至ゝゝ抑亦ゝゝ間話休題
義邦ハ如ゝ藁二郎ふ再會せ一その秘び大ゝゝゝゝその始つ故を
問ふ藁二郎ハ義秀のゝゝ又義秀の指揮ふゝく箆姫ゝ云ゝ尼ゝ
蕃ふ送り届ー縁由を告ふゝゝ義邦ゝゝ秘びゝ義の義信を賞嘆ー
義秀の義勇ゆゝく不思議ふ虎穴を出ゝゝゝ箆姫のゝ人ゝでハ
問ふ暇ゝく心ゝかゝるのゝゝゝ吾妹ゝゝふ再生の幸ゝゝゝ外ゝゝ
皆彼人の賜ゝゝ秋人みゝゝ滅ゝゝゝ亦滅ゝゝゝゝ再び朝夷ふ力と
勢ーく寧徑仕を滅ゝゝ汝ハ直ゝ菴ふいゝゝく復讐の顛末を箆姫ふく告
ゝといひけく身を起ゝ折ゝ江三二廣光ハゝびく賊徒を殺ゝ靡けく舊の怨ふ
ゝく義邦其処ゝ在ゝゝゝ彼此と索ゝ又柵外をゝゝ招
ゝ聚ひゝ義邦ハ廣光ふ時夏を殺ゝゝ夏の趣又藁二郎ゞ早速の

働くその緊略を説示せば廣光はその首級ぬきて天に献じ地に喜び且藁二郎が遠く来ぬるその忠心を感じて已ぎ藁二郎も亦歓びて別れ後の状を述懐す義邦廣光に辞別して尼が菴へ赴くゆゑ廣光は時夏が首級に大刀を打添て携へて主に従ひつゝ柵門に進み入れば兵火の光り衰へて煙は雲と立かゝる東方を示す程に修羅五郎経任は曩に五十五六鬼六ホが頻に捉に乗ぜ足く憍慢る癖なれば今はなや光仲を撃とるに程あらじとて城楼を下りて奥に赴く婢妾們に酌を熟しく酒うち喫て居たるに獄舎のあたりに失火あるとて婢妾們彼此に騒しく奔走を経任いとの報を聞くとのべ此も動ぜざるに兵共が埋火の等閑なるこゝろいで来しかん今ものゝ滅べるに騒ぐとて叱鎮めくいたゞ物ともせざりしに又賊兵に注進せしく失火は躬方の謀ぬや柵中に横行しく彼此に火を放ちて猛火四方に散乱しく滅留ぐるもゆゑそゞ中に朝夷三郎義秀と名告る猛者ありくいつの程に義邦を獄舎より窃出せり又彼が當に江三三廣光馬糧標吉嗣忠と名告るその其武勇抜群に只見のくるまぐ獄舎のあるこなる林の中に敵の大軍充満く白旌を吹靡し鯨波を揚く攻寄れとぞ出さるゝと言告せしく告藁て又外面へ走去ぬ経任は醉醒くつゝくと想像るに夏實とも為ぬ推はあるとく夏の虚実を見て走せよと声高に呼立すれば廣庭に聚合る賊徒阿と応ぐ中に鵺夜又鵐夜又と喚るる西賊齊一身を起しく二の城門の辺を走去る且しく立ち言状と呼ぶ経任はいたく怒りて欺くゆくいとの當下鵺夜又額より流る汗を振拂へ扨も彼朝夷が火攻の為体空しく夫人を弥すこうさしもに悍死躬方の大勢這奴只一個に撃靡され頭顱砕けて死るもあり目子を起て仆るもあり。譬へば餓る獅子暴て百の獣を駈る


義秀單身ふゝく賊兵戎盧ふを
拾ひあ

如し誰か一人も進むべき血へ流さく肩を走さし屍の横りく岳をなすとのくば鶏夜叉語を続んとく膝立直し両肩を推抗げ。そもそのこたらぐ柵外ゆ光仲を絶ち靡けし。射方へ内外ゆ敵を受く忽地ゆ辟易し初戦の勝利へ再度の敗軍五十五吹又鬼六の諸将士既ゆ戦殁せり。敵前後ようち入く火勢も共又防ぎ〻さればこの御座そもいつでゑ燬を脱るべき今ゆのまちぐ〻知かくのいしと同音ゆ報る我経任笑あくまで眼を睜く驚嘆し原来大事ゆ及びかろ。遽莫義秀光仲又くまれゆ敵せんや踢散くく厨川へ退んと難ゆ所あるべいでくと知へうく鎧を取て裏と投被五枚兜の緒を締て八角ゆ削かくる鐵撮棒を挾き足音ようく揺ぐ〻端近う牽居くる馬ゆ内りと跨れば その隊の賊徒三百名前後左右ゆ従ひつ三の城門を推開ぐく吐と嘯く走出ぐる。畢竟経任田を衡く脱るや不忌。次の巻ゆ解分るをかくちん。

朝夷巡嶋記全傳第四編巻之四終



早稲田大学図書館
011888007344